

地方都市と労演運動

— 1960～80年代における高岡の大衆文化史 —

Local cities and worker's theatre movement

-Takaoka's popular cultural history from the 1960s to the 1980s

社会科学系/大衆文化史/論文

デザイン情報コース

石原 美希

Miki Ishihara

序章 研究対象と本論文の目的

勤労者演劇協会(以下、「労演」と略す)は、1949年大阪において発足し、全国に広がった会員制の演劇鑑賞組織である。労演の活動は1950年代に勤労者を中心に盛り上がりを見せた職場文化運動の1つとして取り上げられているが、人々の要求などの内実から分析している研究は少なく、また地方都市の労演には焦点が当てられていない。

これらを踏まえて、本研究は地方都市の労演運動の実態を明らかにすることで、1960年代以降の地方都市における文化運動のもつ意味を考察することを目的とした。本研究では地方都市の労演の一事例として、1969年に富山県高岡市を拠点として発足した高岡演劇協議会(以下、「高岡労演」と略す)を取りあげる。調査対象期間は発足から名称変更を行う1986年までとし、機関誌の分析を中心に高岡労演の活動を再構築した。

第1章 高岡労演のあゆみ

本章では、高岡労演の全体的なあゆみと基礎情報を整理することによって、高岡労演発足における社会的な背景と会員の要求について考察した。

機関誌によれば、高岡労演結成のきっかけは劇団側からの要請であり、この要請は高校演劇を通じて劇団と繋がりを持つ高校教師を通して、演劇を望む高岡周辺に住む人々に伝えられた。また、会員の職業分布においても教員の割合が大きく、高岡労演の発足と発展に教員が大きく関わっていたとわかる。会員構成においてはその他に主婦が多い、年齢分布において40代以上の会員が多いといった特徴が見られた。また調査対象期間の富山県では、高度経済成長を背景とした市民運動の盛り上がりが見られ、高岡労演発足にも強く影響していると考えられる。

第2章 運営委員が示す「労演運動」の意義

本章では、機関紙に掲載された運営委員会員の発言を中心に、高岡労演における運動理解がどのようなものであったのかを検討した。

そもそも大阪において発足した「労演」は、その運動を通して、新劇と観客組織の相互的な発展を目指した。しかし高岡の場合、それ以前に高岡の観劇状況の改善という問題があった為、地域における文化の定着を目指すものと理解された。また、「労演とは、会員自らが運営する鑑賞団体」とあるといった捉え方には、「高岡労演会員の演劇要求を満たすため」という意味合いが含まれてい

た。高岡において「労演運動」とは、演劇を観劇する機会を自ら作り出すことを基盤として、演劇鑑賞を通じた会員らの自発的な発展を促す運動であった。

第3章 高岡労演の活動と会員の要求

本章では、高岡労演の具体的な活動内容の整理と各活動に対する会員の発言から、高岡における労演会員の活動参加意義を明らかにした。

演劇鑑賞に関わる活動では、「他者」という存在が重要視されており、観劇前後の「他者」との交流を通じて「自分の周囲をあらためて見つめ直す視点」を学びたいという要求がみられた。一方で、「ただ演劇が観たい」といった要求も確認された。また、演劇鑑賞に関わらない活動では、労演の「他者とのつながりを生み出す場」という側面に対し、他者とのつながりを求める労演会員の要求がみられた。また労演運動という文化運動自体に意味を見出している発言には、市民運動に見られた「物資優先の考え方の否定」や「人間性の回復」などの問題意識が含まれていた。よって、市民運動は高岡労演の発展において影響関係を持っていたと考えられる。

終章 結論

以上を通じて、1960年代以降の地方都市における文化運動のもつ意味を考察した。

地方都市では、急激に工業化したことが市民の生活により強く影響したことから、市民運動への関心も大きかったと考えられる。一方で、演劇文化などの都市的な文化に触れ得る機会が比較的少なかった地方都市において、文化それ自体に対する要求は大きかった。地方都市における文化運動の目的には、「自らが望む文化に触れ得る機会を自ら作り出す」ことが含まれていたと言える。よって、1960年代以降の地方都市の文化運動には、文化を通じて自らをより豊かにしていくという目的意識と文化に触れたいという要求をもとに、文化をはぐくむ場所として機能していたといえる。

<主要参考文献>

参考 1) 石川弘義 / 『余暇の戦後史』 / 東京書籍株式会社 / 1979

参考 2) 福間良明 / 『「勤労青年」の教養文化史』 / 岩波書店 / 2020